対馬新聞　第2610号

(1)　昭和62年6月24日（水曜日）

対馬を中継に九州と韓国に〝平和の架け橋〟

国際ハイウエイ建設事業団（東京）が発足して五年になる。〝平和の架け橋〟を掲げ、国際ハイウエイプロジェクトの大構想だ。対馬を中継地として九州本土と韓国間を海底トンネルを通すという夢物語のような巨大構想である。

計画によると、唐津―壱岐間は架橋、壱岐―対馬間、対馬―韓国間はトンネルで、三十年かかり、三十兆円を見込んでいるという。

こんな多額な資金が果たしてどこから出るのかはいざ知らぬが、一大イベントを一民間でやれるはずはなく、国家が中心となってやるべきだと同研究会九州支部総会のたびに聞く。

巨大構想の会長はかつて青函トンネルを手がけた北大名誉教授佐々保雄氏。九州支部長は九大名誉教授高田源清氏であり、それぞれ各部所に部長以下が選任され活動中である。

先年、対馬にも事業所が創設された。陸上部門のボーリングによる地質、海洋調査船による海洋調査も施行、飛行機も備えて随時活用している。調査施設の一環として厳原町小浦に地震測定施設が整備され、稼動中のことはあまり知られていない。

最近、関係者が多数来島して地元関係者にも説明し、理解を深めることに努力中だが、壱岐では県議、町長、地元有力者らが主体となって同研究会壱岐分会が昨年結成された。

巨大構想に伴う附帯事業が対馬、壱岐開発につながると専門の大学教授らは指摘。陸、海で調査研究を行っていることも事実である。

同事業団の梶栗理事長は「常識的な考え方ではこのような巨大プロジェクトは不可能。最初から不可能に挑戦して、これを可能へする考えでなければこのプロジェクトは理解できない」と偉大な構想と情熱をもって陣頭指揮を執っている。

まさに夢物語。だが着々と進捗している事業状況をみると、まんざら夢でもないようだ。

〝平和の架け橋〟の完成後を想像しただけで楽しくなるが、島民の理解、協力が得られるよう、広くオープンに対話することが必要だ。

三山　忠